

世親作『縁起経釈』の名色支について
— 五蘊の意味を中心に —

莊 崑木 (積 大田)

1 はじめに

世親の諸著作には、相互の引用関係などから、『俱舎論』、『釈軌論』、『成業論』、『縁起経釈』という成立順序があることが明らかにされている。これら以外の世親の諸著作に関しては相互の言及が見当たらないため、この四つの作品の前後関係は他の諸著作の位置付けを考える際に重要な拠り所になる。また、『縁起経釈』以前の世親の諸著作には『五蘊論』への言及がないこともあって、室寺の考察¹によると、『五蘊論』は『縁起経釈』の後に著わされた世親の著書とされている。この前提に立てば、『五蘊論』は『縁起経釈』と『二十論』の間に成立した論書と考えられる。ここでは、これらの先行研究を踏まえ、『縁起経釈』の後に『五蘊論』、『唯識二十論』、『三十頌』という順を仮に想定しておく。このように『縁起経釈』は、世親の著作のなかでちょうど唯識関係の作品が現れる境目にあるため、重要な位置を占めている。そしてまた、経量部との関係が緊密である『縁起経釈』は、現存する世親の最初の経典注釈書であり、その意味でも重要性は高い²。

さて、『縁起経釈』の「名色支³」についてみると、これはその十二縁起支の四番目になる。『縁起経釈』の先行研究には第二の「行支」と第三の「識支」とのドイツ語の訳注研究がすでに存在する⁴。また、第七の「受支」の和訳もある⁵。筆者は両者の間にある「名色支」(第四)、「六処支」(第五)、「触支」(第六)の訳注研究を目下行っているが、本論文はその一環として、「名色支」について考察を行う次第である。

2 名色と五蘊

2.1 『縁起経』の名色支

『縁起経釈』は無論、『縁起経』⁶を註釈する論書である。世親は『釈軌論』において経典解釈の方法を論じているが、『縁起経』を註釈する際にもその方法が適用されていると考えられる。つまり、『縁起経釈』では、『縁起経』の経節(sūtra-anta)ごとに註釈するのである。まずその『縁起経』「名色支」の経節が、いかに引用されているかをみる。

① 『縁起経』の名色支の引用

(D23b6) **rnam par śes pa'i rkyen gyis miñ dañ gsugs źes bya ba'i miñ gañ źe na /
gzugs can ma yin pa'i phuñ po bźi ste** / źes rgyas ⁽⁷⁾ par 'byuñ ba dañ / gzugs gañ źe

¹ 室寺 [2010: 213, fn. 1].

² 経量部との関連は、松田 [1982b] 参照。

³ PSVy: D 23b6–26b4, C 24a2–26b7, P 26b5–30a2, G 38b1–43a1, N 27b2–30b2. 今回の考察はこの「名色支」の前半のみ (D 23b6–25a6) を対象とする。

⁴ MUROI [1993]. 「愛支」には FRAUWALLNER [1956: 43–49] のドイツ語訳もある。

⁵ 本庄 [2001]. このほかの『縁起経釈』の研究史のまとめは、楠本 [2007: 20–24] 参照。

⁶ 『縁起経』の文献資料は、CHUNG [2008: 107–10, Sūtra 298] 参照。この「名色支」の引用箇所は、『雑阿含経』第 298 経 (T 2, 85a28–b2) に相当する。

na / gzugs gañ yin pa ci yañ ruñ ste thams cad ces rgyas par*¹⁾ 'byuñ ba de dag ni
phuñ po lña ste / nur nur po dañ / nar nar po dañ / gor gor po dañ / mkhrañ por gyur pa
dañ / rkañ lag 'gyus pa'i gnas skabs nas skye mched drug ma dod pa'i (D^{24a1}) bar du ni
rnam par śes pa'i rkyen gyis miñ dañ gśugs źes bya ste / di ltar des bsgos pa'i bye
brag gis ris mthun pa gźan du de bye brag can du 'grub par 'gyur ba'o*²⁾// (太字は『縁
起經』を引用する箇所)

*¹⁾ DCGN par; P bar. *²⁾ DPN pa'o; CG ba'o.

〔訳1〕『識という縁によって名色』というときの名とは何かというと、四つの無色蘊である。すなわち、「云々と詳しく出ているものと、「色とは何か？ 何であれ、およそ色であるもの、それら全て」云々と詳しく出ているもの、これらが五蘊である。すなわち、カララ、アルブダ、パーシー、ガナ、プラシャーカーの位から、六処が生起していないまでは、「識という縁によって名色」というのである。すなわちそれによって熏習された相異によって他の衆同分において、それが差異を有するものとして成り立つのである。

という『縁起經積』の「名色支」の冒頭において、『識という縁によって名色』というときの名とは何かというと、四つの無色蘊である。すなわち」という経節と、「色とは何かというと、何であれ、およそ色であるもの、それら全て」という経節とを合わせると、『縁起經』の「名色支」の引用になるが、これも完全な引用ではない⁷⁾。内容からすると、「名」の四無色蘊と「色」の色蘊を合わせると、ちょうど「五蘊」になるということである。

この『縁起經積』の名色支の説明では、入胎の五位、すなわちカララ、アルブダ、パーシー、ガナ、プラシャーカーをあげて、名色支を胎生学的な面から説明している。それは六処の生起を境目として終わるのである。

この名色支の成立は、「行」、つまり身・語・意の三業によって、六識身がその認識の主体ではあるものの、さらにアーラヤ識に対して熏習し、その相異によって他の衆同分において差異を有するものとして成立するという、行、識、名色という輪廻転生の過程を示すのである。

さて、この『縁起經』の名色支と言えば、『縁起經』において ādi と vibhaṅga との二部構造のなかの vibhaṅga にあった経節の一つである。ādi とは、「初分」と訳されるが、一種の総論のようなものである。vibhaṅga とは、「分別」と訳されるが、各論のようなものである。この『縁起經』は両方の解説を揃えているので、上座などの経量部の人々に「了義經」とされている。この『縁起經』において、ādi では、縁起の一般的な意味を示すが、vibhaṅga では十二縁起支の各支を解釈する。さらに最後はまとめの章があって、以上の議論を整理して論じるという内容である。この「名色支」には、多様な伝承の『縁起經』における様々な平行文があるが、この經典の特徴に関して、室寺 [1995: 106–07; 1996: 184–85; 2008: 49–56], MUROI [1997: 652–53] などで諸文献の照合が行われている。上記の CHUNG [2008: 107–10, Sūtra 298] に示されている『縁起經』の関連資料は非常に詳

⁷⁾ この後の「名色支」の解釈においても、四無色蘊の定義や四大種と所造などの經典の經句の一部が引用されて解釈されている。

細であるが、ここでは梵・藏・漢の平行文を下記にあげる。

① PSĀVNS 7:

vijñānapratyayaṃ nāmarūpam iti / nāma katamat / catvāraḥ arūpiṇaḥ skandhāḥ /
katame catvāraḥ / vedanāskandhaḥ saṃjñās[k]andhaḥ saṃskāraskandhaḥ
vijñānaskandhaḥ / rūpaṃ katamat / yat kiñcid rūpaṃ sarvaṃ tac catvāri
mahābhūtāni / catvāri ca mahābhūtāny upādāya itīdaṃ ca rūpaṃ pūrvakaṃ ca
nāma tad aikadhayaṃ abhisamkṣīpya nāmarūpam ity ucyate / (CHAKRAVARTI [1932:
198, 11-12], 太字は引用箇所)の平行文)

〔訳〕「識を縁として名色」という。名とは何か、四つの無色蘊である。四つとは何か、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊である。色とは何か、何であれ、すべての色、それは四大種と四大種所造である。この色と前の名を一つにまとめて名色と言われる。

② PSĀVNS_t 7:

rnam par śes pa'i rkyen gyis miñ dañ gzugs źes bya ba la miñ gañ źe na / gzugs can
ma yin pa'i phuñ po bźi ste / tshor ba'i phuñ po dañ / 'du śes kyi phuñ po dañ / 'du
byed kyi phuñ po dañ / rnam par śes pa'i phuñ po'o // gźugs gañ źe na / gzugs gañ
yin pa ci yañ ruñ / de dag thams cad 'byuñ ba chen po bźi dañ / 'byuñ ba chen po bźi
dag rgyur byas pa ste / gźugs 'di dañ / sna ma'i miñ gñi ga gcig tu mñon par bsdu
nas miñ dañ gźugs śes bya'o // (DE JONG [1979: 247])

〔訳〕「識という縁によって名色」という場合、名とは何か、無色の四蘊である。すなわち受蘊と、想蘊と、行蘊と、識蘊である。色とは何か、何であれ、およそ色であるもの、それらはすべて四大種と四大種所造である。この色と前の名の両者を一つにまとめて名色と言われる。

③ 『縁起経』(T 2, 547c8-12)

識縁名色者。云何為名。謂四無色蘊。一者受蘊。二者想蘊。三者行蘊。四者識蘊。
云何為色。謂諸所有色。一切四大種。及四大種所造。此名前名總略為一。合名名色。
是謂名色。

〔訳〕「識を縁とする名色」というが、名とは何か、いわく、四つの無色蘊である。一は受蘊、二は想蘊、三は行蘊、四は識蘊である。色とは何か、いわく、あらゆる色、すなわち一切の四大種と四大種所造である。この色と前の名を総じて一つと略して、合わせて名色と名付ける。これが名色である。

このなかで、PSĀVNS は中央インドに出土した銘文であり、PSĀVNS_t のチベット語訳や、玄奘訳の『縁起経』と同じく、単独で流行する『縁起経』である。このほか、徳慧の『縁起経広釈』に引用された『縁起経』⁸や、AKUp に引用される PSĀVNS_t、『雜阿含経』第 298 経などもある。なお、南伝の論書などにおいて、名を受・想・行の三蘊にして識蘊を「識支」に属させる議論があったが、ここではあくまで世親の引用した北伝の『縁起経』に示される「四無色蘊」という經典内容に沿って、世親の解釈を考察する。無論、『縁起

⁸ MUROI [1997: 652-53].

『縁起經』の「触支」において、大徳赤衣部の説とその經典⁹を引用しているの、南伝の『縁起經』やその解説について、世親はその知識を有するであろうと考えられる。

2.2 『縁起經』の「名色支」における名色の解釈と五蘊の関連

2.2.1 四無色蘊

『縁起經』の「名色支」解釈について、ほぼ前半は『縁起經』の教義にしたがって五蘊を中心として議論を展開するが、後半は名色の諸問題を議論するという形になる。まず名色支解釈の前半の解釈を中心に考察を行う。

① 『縁起經』の名色支の引用（前出）

② 四蘊の定義

de la bde ba la sogs pa rnam pa gsum myoñ ba ni tshor ba'o // dmigs pa'i mtshan ma
'dzin pa ni 'du ⁽²⁾ śes so // de las gźan pa'i sems las byuñ ba dañ / sems dañ mtshuñs par
ldan pa ma yin pa ni 'du byed do // yul ñe bar ^(P27a) dmigs pa ni rnam par śes pa'o //¹⁰

〔訳2〕 その中で楽など三種類の領納は受である¹¹。所縁の特徴を把握するのは想である¹²。それ以外他の心所と心不相応は行である¹³。境を認識するのは識である¹⁴。

⁹ 別稿「世親作『縁起經』の触支解釈」（東大仏教青年会『仏教文化研究論集』第15号掲載予定）参照。

¹⁰ AVSN 120.1-2: **vedanāsaṃjñetyādi / sukhādyanubhavo vedanā** nimittodgrahaṇaṃ **saṃjñā** tadanye caitasikā dharmās cittaviprayuktās ca **saṃskāraskandhaḥ** viṣayopalabdhir **vijñānam** iti /
〔訳〕 受・想などという云々、楽などの知覚（anubhava、領納）は受であり、特徴（nimitta）を把握する（grahaṇa）のは想であり、それ以外の心所（caitasika）法と心不相応（cittaviprayukta）は行であり、境（viṣaya）を捉えること（upalabdhī）は識であるという。

¹¹ 世親の作品における受に関して、次のような資料がある。

『俱舍論』の受蘊：〔梵本〕AKBh 10.11-14; EJMA [1989: 15.22-16.3], 〔藏訳〕AKBh_t D 33a6-b1, P 35a7-b1, 玄奘訳『俱舍論』卷一（T 29, 4a2-4）, 真諦訳『俱舍論』卷一（T 29, 164b13-16）。

『五蘊論』：〔梵本〕PSk 3, 10-13; 27, 2a2-3, 〔藏訳〕PSk_t P13a8-b2（滝川 [1996] の校訂による）, 〔漢訳〕『五蘊論』（T 31, 848b27-29）。

¹² 想蘊の説明：

『俱舍論』：〔梵本〕AKBh 10.15-17, EJMA [1989: 16.4-6], 〔藏訳〕AKBh_t D 33b1-2, P 35b1-2, 〔玄奘訳〕『俱舍論』卷一（T 29, 4a4-6）, 〔真諦訳〕『俱舍論』卷一（T 29, 164b16-19）。

『五蘊論』の想蘊：〔梵本〕PSk 4, 1-2; 27, 2a3, 〔藏訳〕PSk_t P 13b2-3, 〔漢訳〕『五蘊論』（T 31, 848b28）。

心所の大地法の想：

『俱舍論』の「根品」：〔梵本〕AKBh 54.20-21, 〔藏訳〕AKBh_t D 64b4, 玄奘訳『俱舍論』卷四（T 29, 19a18）, 真諦訳『俱舍論』卷三（T 29, 178b12-13）

関連資料は、齋藤 [2011: 53-54] 参照。

¹³ 行蘊の説明：

『俱舍論』：〔梵本〕AKBh 10.18-11.5; EJMA [1989: 16.7-17.5], 〔藏訳〕AKBh_t P 35b3-36a1, 玄奘訳『俱舍論』卷一（T 29, 4a6-17）, 真諦訳『俱舍論』卷一（T 29, 164b19-c2）。

『五蘊論』（冒頭には行蘊の定義、後に各項目に関する長い解説）：〔梵本〕PSk 4, 3-4; 27, 2a4; 4, 5-16, 6; 27, 2a4-32, 5b2, 〔藏訳〕PSk_t P 13b3-4; 13b4-16b8, 〔漢訳〕『五蘊論』（T31: 848c1-2; 848c3-849c26）。

¹⁴ 識の解説：

『俱舍論』：〔梵本〕AKBh 11.6-14, EJMA [1989: 17.6-15], 〔藏訳〕AKBh_t D 33b7-34a2, P 36a1-3, 玄奘訳『俱舍論』（T 29, 4a19-25）, 真諦訳『俱舍論』（T 29, 164c2-7）。

『五蘊論』：〔梵本〕PSk 16, 7-17, 10; 32, 5b2-34, 6a2, 〔藏訳〕PSk_t P 16b8-17a6, 〔漢訳〕『五蘊論』

受蘊¹⁵について、『俱舎論』の「界品」では、詩頌 (v. 14c) において、受 (vedanā, tshor ba) を「経験すること (anubhava, myoñ ba, 領納)」と定義し、散文において、さらに三種の受をあげている。すなわち楽 (sukha-, bde ba) 受、苦 (duḥkha-, sdug bsñal ba) 受、不苦不楽 (aduḥkhāsukha-, sdug bsñal yañ ma yin bde ba yañ ma yin pa) 受という。一方また、六受身 (ṣaḍ vedanākāya, tshor ba'i tshogs drug) も挙げられている。すなわち眼和合触所生の受 (cakṣuḥsaṃsparśajā vedanā, mig gi 'dus te reg pa las byuñ ba'i tshor ba) から意和合触所生の受 (manaḥsaṃsparśajā vedanā, yid kyi 'dus te reg pa las byuñ ba'i tshor ba) までである。六受身は『雑阿含経』の「六六法経」からきた分類であるが、三受と六受身が同じ受蘊を指しているという。これも『縁起経釈』の「受支」に関わるので、MUROI [1991] のテキストの校訂と本庄 [2001] の和訳があるため、ここでは扱わないことにする。『五蘊論』において、世親はさらに、楽は滅のときに (*nirodhe, 'gags na) 和合の欲 (saṃyogacchanda, phrad par 'dod pa) があり、苦は生起してから (utpādād, byuñ na) 乖離の欲 (viyogacchanda, bral bar 'dod pa) があり、不苦不楽は生起してから両方の欲ともないということを示している¹⁶。

想蘊について、『俱舎論』の「界品」では、詩頌 (v. 14cd) において、想 (saṃjñā, 'du śes) を「特徴を把握することを本質とする」(nimittodgrahaṇātmika, mtshan mar 'dzin pa'i bdag ñid, 能取像為体) と定義し、散文において、青・黄・長・短・男・女・怨・親・苦・楽など (nīla, pīta, dīrgha, hrasva, strī, puruṣa, mitra, amitra, sukha, duḥkha, śnoṇ po, ser po, riñ po, thuñ ñu, pho, mo, mdza' pa śes, mdza' pa śad ma yin pa, bde ba, sdug bsñal ba) の特徴を把握することが想蘊であると示す。また、受と同じように、六想身 (ṣaḍ saṃjñākāya, 'du śes kyi tshogs drug) を示すことから、「六六法門」の「一法門」としてその重要性が窺われる。しかし、『縁起経釈』の「名色支」における「想蘊」の定義は、むしろ『俱舎論』の「根品」の大地法における想心所や、『五蘊論』の「想蘊」の文言に近い。『俱舎論』の大地法の想の定義は、想 (saṃjñā) を「想念すること、すなわち対象の特徴を把握すること」(saṃjñānaṃ viṣayanimittodgrahaṇ, 'dus nas śes pa ste yul la mtshan mar 'dzin pa) とする。この saṃjñānaṃ という言葉は玄奘訳に見当たらないが、真諦訳では「心」と訳し、藏訳では「集合して知る」('dus nas śes pa) と訳す。すなわち接頭辞の saṃ- を 'dus nas と訳し、動詞語根 jñā から派生した jñāna を śes pa に訳し、これをもって想 (saṃjñā) の同義語としている。『五蘊論』では、単に「対象の特徴を把握すること」(viṣayanimittodgrahaṇa, yul la mtshan mar 'dzin pa) を想 (漢訳:「想蘊」) と定義するのみである。ただし、藏訳『五蘊論』のみに、三種の想があると云って、少・廣大・無量 (chuñ ñu, rgya chen por gyur pa, tshad med pa, 小想・大想・無量想¹⁷) を挙げている。

行蘊については、『五蘊論』の「行蘊」の冒頭で定義が与えられているが、『縁起経釈』の「名色支」の行蘊の定義とよく一致している。『五蘊論』において、行 (saṃskāra) を「受・想以外の心所法 (caitasikā dharmāḥ, sems las byuñ pa'i chos rnam, 心法) および心不相応

(T 31, 849c27–850a10).

¹⁵ 以下の四無色蘊の議論に関する出典は、上記の文献資料による。

¹⁶ PSK の写本に欠ける箇所があるので、校訂は TrBh 10, 22–25 によって想定文を示している。

¹⁷ 「小想・大想・無量想」は『品類足論』(T 26, 693a11–12) においても見られる (斎藤 [2011: 53]).

(cittaviprayuktās ca, sems dañ ldan pa ma yin pa rnams, 心不相応行)」と定義する。これには『俱舎論』の「行蘊」解釈の散文箇所と一致するところもある。つまり「ほかの心所法および不相応」(śeṣāṇāṃ caitasikāṇāṃ viprayuktānāṃ ca, sems las byuñ ba lhaḡ ma rnams dañ ldan pa ma yin pa rnams, 餘心所法及不相応)という箇所がまさにこの『五蘊論』の「行蘊」の定義に近似する。無論、『俱舎論』の方が「行蘊」の解釈がやや長くなるが、これはその中で三つの経典¹⁸を引用して行蘊の性質を示すからである。玄奘訳『俱舎論』は一番目の『雜阿含經』の第 61 經の経句を「六思身は行蘊である(六思身為行蘊)」と訳すが、梵本と蔵訳では「六思身」(ṣaṭ cetanākāyāḥ, sems pa'i tshogs drug)のみである。称友釈も同じではあるが、称友釈は解釈する際漢訳と同じく、経句を「行蘊とは何か。六思身であるという」(saṃskāraskandhaḥ katamaḥ / ṣaṭ cetanākāyā iti)としている¹⁹。この経典は有名であり、上座の説の「行蘊は思のみ(行蘊唯思)」の根拠となる一方で、衆賢の『順正理論』において反論を招いた²⁰。『俱舎論』において、思²¹が「業を自性としているから、造作において最勝である」(karmasvarūpatvād abhisamkarāṇe pradhānā, rañ bzin yin pa'i phyir mñon par 'du bya ba, 行名造作, 思是業性造作義強²²)というように「思(六思身)」を行蘊とする理由を挙げている。また、二番目の『雜阿含經』の第 46 經の引用について、「有為(saṃskṛta)を造作する(abhisamkaroti)ので、行取蘊(saṃskāropādānaskandha)と言われる(saṃskṛtam abhisamkaroti, tasmāt saṃskāropādānaskandha ity ucyate, 'dus byas mñon par 'du byed de, de lta bas na 'du byed ñe bar len pa'i phuñ po źes bya'o, 若能造作有漏有為名行取蘊)」として造作と行蘊との関連を示している。この行蘊に関して、『縁起経釈』の「行支」は十二支縁起の立場から論じるが、内容としては非常に緊密である²³。特に「有為を造作するので、行取蘊」であることや、「六思身」という『雜阿含經』の第 46, 61 經の経句もその中に引用されて議論されている²⁴。ただし、「行支」については『縁起経』に示される三種の業(身・語・意)、または福・非福・不動などの三業を中心として議論が展開されている。

第四の識蘊について、『俱舎論』の「界品」では、詩頌(v. 16a)において、識(vijñāna)をそれぞれに認識するもの(prati vijñapti, 各了別)と規定し、散文において、さらに様々な境をそれぞれ認識し把握すること(ṣiṣayaṃ ṣiṣayaṃ prati vijñaptir upalabdhir, 各各了別彼彼境界總取境相)が識蘊であるという説明を加える。そしてここでもまた、『六六法経』による「六識身」が挙げられている。六処においては意處(manaāyatana)に相当し、十八界において七心界、すなわち六識界と眼界(caḡṣurvijñānadhātu 眼識界ないし manovijñānadhātu 意識界, manodhātu 眼界)に相当する。

¹⁸ 『雜阿含經』の第 61, 46, 223 經である。出典は EJIMA [1989: 16, fn. 7, 9, 12] 参照。

¹⁹ 「六思身」とは眼触(所)生思(caḡṣuṣaṃsarsajā cetanā)から意触(所)生思(manahsaṃsarsajā cetanā)までである。

²⁰ 加藤 [1989: 205, fn. 38], 『順正理論』卷二(T 29, 339b)。

²¹ 行蘊と関連する「思」の資料は、齋藤 [2011: 55-56] 参照。

²² 蔵訳においては、「業(karma)」の訳語がなかった。

²³ この『縁起経釈』の「行支」については、室寺義仁のドイツ語による訳注研究(MUROJI [1993: 42-63; 126-43])がある。

²⁴ MUROI [1993: 52-53; 134]。

『五蘊論』では、識蘊の説明が長く、阿頼耶識が導入されている。この箇所はすでに室寺 [2000: 174–75] の和訳および論考があったが、当時梵本の『五蘊論』は公刊されていなかったため、蔵訳からその原文を想定する作業を行っている。ここでは、梵本をもとに、蔵訳と漢訳を照合しながらその内容を訳出することにする²⁵。まずその冒頭には識の定義が挙げられ、その次に長い説明が加えられる。

識 (vijñāna, rnam par śes pa, 識蘊) とは何か。所縁 (ālambana, dmigs pa, 所縁境) に対してそれぞれ認識する (ms: prati²⁶ vijñapti; ed.: vijñapti, rnam par rig pa, 了別) ことである。また、それは心 (citta, sems) や意 (manas, yid) でもある²⁷。種々である (citrata, sna tshogs pa, 採集) から、また意が依りどころである (manahsanniśrayata, yid rten byed pa, 意所撰) からである。一方、主に心 (citta, sems) はアーヤ識 (ālayavijñāna, kun gzi rnam par śes pa, 阿頼耶識) である。つまり、それは一切の行の種子が積重した (citam sarvasaṃskārabjajih²⁸, 'du byed thams cad kyi sa bon bsags pa, 諸行種子皆採集) ものである。さらにまた、それは所縁と行相が分断せずに (aparicchinnāmbanākāra, dmigs pa dan rnam pa yoṅs su ma chad pa, 行縁不可分別), 識 (vijñāna) が一つの種類のものとして (ekajātīya, rigs gcig pa, 前後一類) 相続して随転するもの (santānānuvṛtti, rgyun chags par 'jugs pa, 相續隨轉) である。なぜなら、滅尽定や無想定、無想 (nirodhasamāpatti, asañjñīsamāpatti, āsañjñika, 'gog pa'i sñoms par 'jugs pa, 'du śes med pa'i sñoms par 'jug pa, 'du śes med pa pa, 滅盡等至・無想等至・無想所有) から起きた (vyutthita, laṅs nas) 者には、境を認識する (viśayavijñapti, yul rnam par rig pa, 了別境) 転識 (pravṛttivijñāna, 'jugs pa'i rnam par śes pa, 轉識) が再び生じる (utpadyate, 'byuñ ba, 還生)。所縁縁 (ālambanapratyaya, dmigs pa'i rkyen) に観待して (āpekṣa, ltoṅ nas, 待) 他の種類として転じるもの (prakāraṅtaravṛttita, rnam pa gzan du 'jug pa ñid, 差別轉) であるからであり、または間断しても再び転じ

²⁵ [梵本] PSk 16, 7–17, 10; 32, 5b2–34, 6a2: vijñānaṃ katamat / ālambanavijñaptiḥ (ms: ālambanaṃ prati vijñāptiḥ) / cittam mano 'pi tat / citratam manahsanniśrayatam copādāya / prādhānyena punaś cittam ālayavijñānam / tathā hi tac citam (ms: cittam) sarvasaṃskārabjajih / tat punar aparicchinnāmbanākāraṃ vijñānam ekajātīyaṃ santānānuvṛtti (ms: anu om.) ca / yato nirodhasamāpattiyasañjñīsamāpattyaśaṅjñikebhyo vyutthitasya punar viśayavijñāptyaḥkhyam pravṛttivijñānam utpadyata (ms: -e /) ālambanapratyayaāpekṣam (ms: /) prakāraṅtaravṛttitām chinnapunarvṛttitām saṃsārapravṛttinivṛttitān copādāya / ālayavijñānatvam punaḥ sarvabījālayatām ātmabhāvā (ms: bhāva=māna) layanimittatām kāyālinatām copādāya / ādānavijñānam api tat (ms: /) kāyopādānam (ms: -ṃ co-) upādāya / prādhānyena mana ālayavijñānāmbanā (ms: /) sadātmanohātmadṛṣṭyātmamān (ms: sadātmanān-) ātmasnehādisamprayuktaṃ vijñānam ekajātīyaṃ santānānuvṛtti ca / arhattv (ms: am in.) āryamārganirodhasamāpattiyavasthām sthāpayitvā // (校訂版と写本との異同の一部を示す) [蔵訳] PSk P 16b8–17a6, [漢訳] 『五蘊論』 (T 31, 849c27–850a10)。なお、安慧の『五蘊論釈』(Pañcaskandhavibhāṣā) の梵本が発見されており、KRAMER による校訂本が刊行される予定であるが、識の箇所の一部の和訳研究はすでに松田 [2010] でなされているので参照されたい。この写本に関しては、KRAMER [2008] 参照。

²⁶ 写本の prati という言葉は、蔵訳と漢訳にはなかったものの『俱舍論』にはあるので、当面 prati を残す読みを採用する。

²⁷ 心と意は識と並列される場合がある。『俱舍論』の心と意と意識の定義に関する資料について、斎藤 [2011: 39–41, citta; 42–46, manas; 47–50, vijñāna] 参照。

²⁸ 写本には cittam とあるが、ここでは校訂本の citam で読む。

るもの (chinnapunarvṛttita, chad nas yañ 'byuñ ba ñid, 數數間斷還復轉) であるからであり、生死を流転させ還滅させるもの (saṃsārapravṛttinivṛttita, 'khor bar 'jug pa dañ ldog pa, 令生死流轉旋還) であるからである。一方、アーラヤ識であることは (ālayavijñānatva, kun gzi rnam par śes pa de ñid, 阿頼耶識), 一切の種子の基礎となっている (sarvabijālayata, sa bon thams cad kyi gzi ñid, 能攝藏一切種子) からであり、または自体への愛着を特徴とする (ātmabhāvā(ms: bhāvā=mānā)layanimitata, lus kyi kun gsi dañ rgyu ñid, 能攝藏我慢相²⁹) からであり、身体に依住する (kāyālīnata, lus la gnas pa ñid, 緣身為境界) からである。それはアーダーナ識 (ādānavijñāna, len pa'i rnam par śes pa, 阿陀那識) でもある。[すなわち] 身体を執持する (kāyopādāna, lus len pa, 能執持身) からである。主に意 (manas, yid) はアーラヤ識を所縁とするもの (ālayavijñānālambana, kun gzi rnam par śes pa la dmigs, 緣阿頼耶識為境) である。すなわち、常に我癡・我見・我慢・我愛などと相応する (sadātmamohātmaḍṣṭyātmamān(ms: sadātmamān-)ātmasnehādisamprayukta³⁰, rtag tu bdag tu rmoñs pa dañ bdag tu lta ba dañ bdag tu ña rgyal dañ bdag la chags pa la sogs pa dañ mtshuñs par ldan pa, 恒與我癡我見我慢及我愛等相應) 識 (vijñāna, rnam par śes pa) であり、同じ種類として相続して随転するもの (ekājāṭīyaṃ santānānuvṛtti, rigs gcig pa dañ rgyun chags par 'jugs pa, 前後一類相續隨轉) である。阿羅漢および、聖者の道と滅尽定に入った時 (arhattv(ms: am in.)āryamārganīrodhasamāpattyavasthā, dgra bcom pa dañ 'phags pa'i lam dañ 'gog pa'i sñoms par 'jug pa'i dus, 阿羅漢果及與聖道滅盡等至現在前位) は除外する。

世親は『縁起経釈』の識支において、すでにアーラヤ識を導入しているが³¹、この点で『五蘊論』の識の解釈との繋がりが窺える。しかし、『五蘊論』のこの識の解釈は、アーラヤ識の語源解釈だけではなく、アーダーナ識の解釈も取り入れている。また、最後の意 (manas) についての解説においては、『三十頌』の第六と第七詩頌のマナ識 (末那識) の定義と一致している³²。これに対して、『縁起経釈』にはマナ識の直接の解釈は見当たらない。この点で『五蘊論』の識説は、『縁起経釈』と比べて更に整備された内容になっていることが分かる。なお、この『五蘊論』の識の解説箇所では、心と意の解釈をもって識との関連性を論じており、心・意・識という唯識の識論の構造が窺える。このように、この『五蘊論』の心意識の論説は、『俱舍論』の根品における心意識説とは全く別のものになっていて、世親の唯識説の一端を提示したものであるとも言えよう。

²⁹ 漢訳においては、「能攝藏我慢相」(我慢 [ātmamāna] を攝蔵する [ālaya] 特徴を持つもの [nimittata]) としているので、むしろ現存の梵本の写本 'ātmamānālayanimitata' とよく一致している。逆に、梵本の校訂は、蔵訳に従って、写本を訂正したということになる。

³⁰ 写本には、'ātmamohātmaḍṣṭi' (bdag tu rmoñs pa dañ bdag tu lta ba, 我癡我見) が欠けている。

³¹ この点は、様々な論考が行われたが、代表的なものとして、松田 [1982a], Мукол [1993: 64-123; 144-201], 室寺 [1993] などがある。特に室寺による『縁起経釈』の識支の訳注および研究は画期的である。また、安慧の『中辺分別論広註』において、この『縁起経釈』の識支の引用と解釈もあるが、その照合研究は室寺 [2004] に詳しい。

³² TrBh 64-69. 詩頌の梵蔵漢テキストの整理と和訳は、廣澤 [2005: 8-9(L)] 参照。

2.2.2 識の語源解釈

③知と識の同体・別体の問題

de la kha cig na re cuñ zad śes pa ni rnam par śes pa ste^{*1)} cuñ zad zos pa bźin no // mi bzañ ba'i śes pa ni rnam par⁽³⁾ śes pa ste / gzugs ñan pa bźin no // śes pa'i las nus pa med pa'i śes pa ni rnam par śes pa ste / sems g-yeñs pa bźin no // ^(G39a) yoñs su ma rdzogs pa'i śes pa ni rnam par śes pa ste / yan lag ma tshañ ba bźin no // mi gsal ba'i śes pa ni rnam par śes pa ste / kha zas⁽⁴⁾ ma źu ba bźin no źe na / de ltar 'dod na ni rnam par śes pa źes bya ba ni śes pa'i bye brag kho na yin par 'gyur ro // śes pa dañ rnam par śes pa gñis mtshuñs par ldan par yañ mi 'gyur ro // ^(N28a) śes pa źes bya ba sems las byuñ ba'i chos kyañ 'du byed kyi phuñ por bsduñ par mi⁽⁵⁾ 'gyur ro // de lta bu ni grub^{*2)} pa'i ^(C24b) mtha' yañ ma yin no // de bas na śes pa las rnam par śes pa rigs gźan yin te / dper na bre las gźal med khañ dañ / mu tig gi chun po las gtsug lag khañ lta bu'o //

^{*1)} DC de; PGN ste. ^{*2)} D gab; CPGN grub.

〔訳3〕これに対して、ある人は言う。少分の知が識である。すなわち、少分を食べたように、勝れない知が識である。すなわち、粗悪な色のように、知の働く能力のない知が識である。すなわち、心の錯乱者のように、未円満の知が識である。すなわち、五体不満足のように、明了でない知が識である。すなわち、食べても消化しないように、と〔以上のように〕いうならば、このように考えられるなら、識というのは、知の特殊なものにすぎないことになってしまう。知と識の両者は等しく相応〔法〕にもならないのである。知という心所法³³も行蘊に撰されない。以上のようなものは定説（*siddhānta）でもないのである。それゆえ、識は知とは別の種類である。たとえば、天宮が一升とは、ま大寺院が真珠の首飾りとは〔別の種類である〕ように。

この箇所の「識」に関する解釈は、『五蘊論』などの説明と異なっており、主に識の接頭語とその複合語の意味の解釈を中心とする問題である。この問題は『婆沙論』にも多少の議論が見られるので、従来から存在していた識の語源解釈問題の文脈に沿って世親は議論を構成していると考えられる。すなわち、この問題は、有部の論書にも存在する議論なので、有部との議論の延長線にあったと言えよう。したがって『五蘊論』などのように唯識（阿頼耶識など）の立場で識を扱うものではなく、有部などの部派的な議論と見なしうるであろう。『縁起経釈』において、「ある人々 (kha cig na re)」は、少分の智 (cuñ zad śes pa)、勝れない智 (mi bzañ ba'i śes pa)、知の働く能力がない智 (śes pa'i las nus pa med pa'i śes pa)、未円満の智 (yoñs su ma rdzogs pa'i śes pa)、明了でない智 (mi gsal ba'i śes pa) などというように、智 (jñāna) とその接頭辞 (vi-) との組み合わせによって識 (vi-jñāna) を論じている。すなわち、接頭辞 vi-を、少分の (cuñ zad)、勝れない (mi bzañ ba)、知の働きの無い (śes pa'i las nus pa med pa)、未円満の (yoñs su ma rdzogs pa)、明了でない (mi gsal ba) などというように解釈し、それを知 (śes pa, *jñāna) と結合することで、識 (vijñāna) の意味を導出しているのである。しかし、こうした解釈は、あくまで jñāna と vijñāna が同じ実体であると認識する立場によっているに過ぎないので、知と識が別体で

³³ 心所法の中の慧 (prajñā, śes rab) 心所は、この śes pa (jñāna) と同義語になるであろう。

ある説にとっては通用しない。このような議論も、『俱舍論』の無明支の解釈³⁴において無明と明が同体か別体かという議論があったのと同様に、別体という結論に落ち着いたようである。この無明の議論については、MEJOR [2002] の優れた考察が参考になる³⁵。すなわち、知 (jñāna) を識 (vijñāna) と同体にと考えると、識 (vijñāna) は心王なので、知 (jñāna) も心王になるという矛盾が生じてしまう。つまり、知 (jñāna) は慧と同じく心所法であるので、本来は心王の識と相応する性質をもつ心所に位置づけられるべきである。それゆえ、心王の識が心所である智の特殊なもの (śes pa'i bye brag) と考えるのはふさわしくない。また、識は識蘊に相当するが、知は行蘊に属するべきである。それゆえ、両者は別体と理解されねばならない、という。

2.2.3 色蘊の四大種と所造および名色の総称

④四大種

'byuñ ba chen po bži ni sa dañ chu dañ me dañ rluñ gi khams rnam te / ⁽⁶⁾ sra ba dañ gśer ba dañ / dro^{*1)} ba dañ g-yo ba'i mtshan ñid do //

*1) D dri; CPGN dro.

〔訳 4〕四大種³⁶は地と水と火と風の界である。すなわち、堅強と流湿と温燥と動揺という特徴である。

『俱舍論』の「界品」では、詩頌 (v. 12) において、大種 (bhūta) の説明を示している³⁷。その内容は、ほぼこの『縁起経釈』の四大種の定義と一致する。このほか、『五蘊論』³⁸では、色 (*rūpa, gzugs, 色蘊) を四大種 (*catvāri mahābhūtāni, 'byuñ ba chen po bži dag) と四大種所造諸色 (*catvāri mahābhūtāny upādāya, 'byuñ ba chen po'i bži dag rgyur byas pa) によって説明するが、それぞれの性質を序列に述べる。この箇所は写本が欠けているので、梵語の校訂文は想定されたものである。四大種について、それぞれを地界 (*pṛthivīdhātu, sa'i khams) の硬さ (*khakkhaṭatva, sra ba ñid, 堅強性) と、水界 (*abdhātu, chu'i khams, 水界) の湿り気 (*sneha, gśer ba ñid, 流湿性) と、火界 (*tejodhātu, me'i khams) の温かさ (*uṣmā, tsha ba ñid, 温燥性) と、風界 (*vāyudhātu, rluñ kyi khams, 風界) の動揺性 (*laghusamudīraṇatva, yañ zīñ g-yo ba ñid, 軽等動性) として説明する。これは『縁起経釈』における、堅強 (sra ba) と、流湿 (gśer ba) と温燥 (dro ba), と動揺 (g-yo ba)

³⁴ AKBh 140, 24–142, 13 (ad. v. 28cd–29).

³⁵ 無明 (avidyā) の接頭辞 a- と vidyā との結合関係は、『俱舍論』に論じられているが、MEJOR [2002] の考察によると有財積になるという。

³⁶ 『縁起経』の引用は、冒頭の出典を参照。

³⁷ AKBh 8, 18–22; EJMA 12, 4–13, 5:

bhūtāni pṛthivīdhātur aptejovāyudhātavaḥ /
dhrtyādikarmasamsiddhāḥ kharasnehoṣṇateraṇāḥ // (12)

〔訳〕諸の大種 (bhūta) は地界 (pṛthivī-dhātu), 水・火・風 (ap-, tejo-, vāyu-) 界である。持 (dhr̥ti) など (samgraha 攝, pakti 熟, vyūhana 長) の働き (karman, 業) が成立するものであり、堅・湿・煖・動 (khara, sneha, uṣṇatā, īraṇa) である。

〔玄奘訳〕『俱舍論』卷一 (T 29, 3a26–b13)。

³⁸ 色: [梵本] PSk 1, 6–7, [藏訳] PSk_t P 12b7–8, [漢訳] 『五蘊論』(T 31, 848b9) 四大種: [梵本] PSk 1, 8–2, 2, [藏訳] PSk_t P 12b8–13a2, [漢訳] 『五蘊論』(T 31, 848b9–12) 四大種所造: [梵本] PSk 2, 3–5, [藏訳] PSk_t P 13a2–3, [漢訳] 『五蘊論』(T 31, 848b12–14)。

の特徴 (mtshan ñid) という定義とほぼ一致する。

⑤所造

rgyur byas pa'i gzugs ni mig dañ / rna ba dañ sna dañ / lce dañ lus kyi dbañ po rnam
so // de'i yul la gzugs dañ / sgra dañ dri dañ ro dañ 'byuñ ba chen po mi gtogs*¹⁾ pa'i
reg bya'o // yid kyi yul ni nram par rig byed ma yin pa'o // ⁽⁷⁾ 'dir ni lus kyi dbañ po dañ
gzugs dañ / ⁽²⁾ sgra dañ / dri dañ ro dañ reg bya'i phyogs gcig yin par rig par bya'o //

*¹⁾ DC ma rtog; PGN mi gtogs. *²⁾ DC gzugs dañ / sgra dañ /; PGN gzugs dañ /.

〔訳5〕所造³⁹色は眼と耳と鼻と舌と身という根である。その境には、色と声と香と味と大種に摂されない触がある。意の境は無表である。ここでは、身根と色と声と香と味と触の一分であると知るべきである。

『俱舍論』の「界品」⁴⁰では、詩頌 (v. 9) において、色蘊を五根と五境と無表色と規定するが、これらの諸法はまさに『縁起経釈』のこの「所造色」の箇所に対応する。またこの所造色の解釈は『五蘊論』においても反映されている。すなわち、四大種と所造を合わせて色蘊にするのは世親の論書では『縁起経釈』から始まるのであり、『五蘊論』においても同様の条項にまとめられてそれぞれの定義が挙げられている。このような分類は『縁起経』も採用するので、『縁起経』の色蘊の規定が世親の思想に対して影響を与えたと言えよう。そして、この『縁起経釈』を経て、『五蘊論』に至ってその色蘊の定義が大種と所造であるという解釈が確立する。

『俱舍論』の色蘊：

五根と五境と無表色

『縁起経』『縁起経釈』『五蘊論』の色蘊：

四大種と所造色

『縁起経釈』の所造色：

眼と耳と鼻と舌と身の五根

色と声と香と味と大種に摂されない触の五境、および意の境の無表

『五蘊論』の四大種所造諸色：

眼根・耳根・鼻根・舌根・身根、色・聲・香・味・所觸一分、無表色

『縁起経釈』において与えられなかった「所造色」に関する個別の説明は、『五蘊論』の所造色の解釈⁴¹において要点をおさえてまとめられている。これらの諸法は、斎藤 [2011: 1-38] の『俱舍論』の七十五法における「色」法 (=色蘊) の十一項目に対応するが、『五蘊論』の説明は、『俱舍論』の繁雑な議論と『縁起経釈』の名目のみの簡略な列举の折衷としての、まとまった形になっている。

³⁹ 『縁起経』の引用は、冒頭の出典を参照。

⁴⁰ 『俱舍論』の色蘊：〔梵本〕AKBh 5, 19-23; 5, 24-8, 9; EJIMA [1989: 7.14-18; 7.19-12.3], [玄奘訳]『俱舍論』巻一 (T 29, 2b6-11; 2b11-3a26), [真諦訳]『俱舍論』巻一 (T 29, 163a3-6; 163a6-c15)

⁴¹ 四大種所造の五根：〔梵本〕PSk 2, 6-10, [藏訳] PSk_t P 13a3-4, [漢訳]『五蘊論』(T 31, 848b14-17) その五境：〔梵本〕PSk 2, 11-3, 7; 27, 2a1, [藏訳] PSk_t P 13a4-8, [漢訳]『五蘊論』(T 31, 848b17-24) 無表色：〔梵本〕PSk 3, 8-9; 27, 2a1-2, [藏訳] PSk_t P 13a8, [漢訳]『五蘊論』(T 31, 848b24-26)

⑥名と色からなる名色

gzugs 'di dag dañ sña ma'i miñ gcig tu mdor bsdus te / gñis gcig ñid du ston na ni gžan du tshig sbyor ba'i rtog pa bsal ba'i phyir ro //

〔訳6〕これらの色と先の名を一つに一体としてまとめる。すなわち、二つを一つとして示す⁴²場合は、別に言葉を結合する考えを除くためである。

以上の色 (rūpa, 色蘊) と最初の名 (nāma, 四無色蘊) と合わせて「名色」(nāmarūpa) と名付ける。このことは、名色を一つの慣用語として使うので、他の結合関係の可能性を排除する意味をこのように示す。以上は、『縁起経』の経句を経節ごとに引用して解釈したものであるが、「名色支」の世親の解釈は実際のところこれ以後になされる。以下の解釈は非常に長いので、まず「名色」の定義に関する箇所を挙げる。

2.2.4 名色の生起順

入胎の後、名色は次の刹那の名色を生じさせる。そしてその後六処が生じるまでの間、全てが名色支になるとされるが、それは縁起支の生起関係を考えて、矛盾ではないかという問題が提起される。

⑦名色の生起の次第

skyes pa'i skad cig ^{(D24b1) (G39b)} ma phyi ma rnam ni miñ dañ gšugs ñid kyi rkyen gyis miñ dañ gzugs ma yin nam / ji ltar de dag rnam par śes pa'i rkyen gyis yin že na / ^(P27b) rañ gi rigs skad cig ma gžan yan lag gi rkyen gyi dños por ni 'dir brjod par*¹⁾ bžed pa ma yin gyi / khyad par can gyi rdzas gžan gyi*²⁾ dños ⁽²⁾ por brjod par bšed pa yin pas dañ por skye ba ñid kyi rkyen yin par bstan gyi / skyes pa'i rgyun gyi rkyen ma yin no //

de lta ma yin na ma rig pa yañ*³⁾ ma rig pa'i rkyen yin par brjod par bya dgos par thal bar 'gyur ba dañ / mnam par śes pa yañ rnam par śes pa'i rkyen yin par brjod par bya ⁽³⁾ dgos par 'gyur te / 'du byed kyis yoñs su bsgos pa'i skad cig ma dañ po ni 'og ma'i rkyen yin par brjod par bya dgos par 'gyur ro //

ji ltar thog mar nur nur por 'dug go // nur nur po las nar nar por skye'o // nar nar po las gor gor por skye bar*⁴⁾ 'gyur ro // gor gor po las mkhrañ ⁽⁴⁾ por 'gyur ro // mkhrañ po las ^{N28b} rkañ lag skye bar 'gyur / skra dañ spu dañ sen mo la sogs pa 'byuñ yañ / 'dir nur nur po la sogs pa rnam nur nur po la sogs pa'i rkyen ñid yin par mi brjod pa de bšin du 'dir yañ rig*⁵⁾ par bya'o //

*1) DC bar; PGN par. *2) DC gyi; PGN gyi rkyen gyi. *3) DC yañ; PGN yañ / yañ. *4) D par; CPGN bar. *5) DC rigs; PGN rig.

〔訳7〕生起した後の刹那は、同じ名色という縁によって名色があるのではないのか、なぜそれらが識の縁によってであるのか、というならば、自らの〔共通した〕種類が他の刹那に支の縁の自体になると、ここで述べようとしているのではない。特殊性をもった存在が他の自体になると述べようとしているので、最初に生起するものみの縁であると述べるが、生起したものの相続の縁〔であると述べようというの〕では

⁴² 『縁起経』の引用は、冒頭の出典を参照。

ない。

そうでなければ、無明も無明の縁であると述べねばならないことになってしまう。そしてまた、識も識の縁であると述べねばならないことになる。すなわち、行によって熏習された最初の刹那は後の縁になると述べねばならないことになる。

たとえば、「最初はカララとしてある。カララからアルブダが生じる。アルブダからパーシーが生じる。パーシーからガナが生じる。ガナからブラシャーカーが生じ、ないし髪と毛と爪などが現れもする」、[という] この中ではカララなどがカララなどの縁になるとは述べられていないので、ここでもそのように理解すべきである。

世親は、以上のように、名色が名色の縁になると考えてはいけないと論じる。というのも、もし名色が名色の縁であるとする、無明も無明の縁、識も識の縁、ということになってしまう。要するに、十二縁起の縁起支の生起関係は、各支の特徴が明確に生じた場合にのみ、支として成り立つのである。すなわち、識に縁って名色、というのは、行によって熏習された識が後の名色の縁になるということであるが、この六処までの、胎児の五つの生長段階がそれぞれ縁起支になっているのではない。なお、この入胎五位の経典に関して、『俱舍論』『世間品』においても経典の二つの詩頌を引用している⁴³。このほか、以上の問題に関して、『決定義経註』にもまとめられている⁴⁴。

2.2.5 名の語源解釈

次は名の語源問題である。『俱舍論』の「世間品」の名色支においては「名」のみが解釈されたが、『縁起経釈』の「名色支」のこの箇所においては、それとは異なった解釈がさらに提起された。

㊸名の語源解釈

ci'i phyir yañ phuñ po bzi la miñ śes bya že na / ⁽⁵⁾ 'gyur bas na miñ žes bya ste / dmigs pa dañ mnam pa dañ rab tu dbye ba'i bye brag ^(C25a) gis rgyun mi 'chad par de'i rgyun yoñs su 'gyur ba'i phyir ro // śi ste gzugs gyi lus bor nas skye ba ^(G40a) gžan *¹⁾ gyi dños por de'i rgyun yoñs su 'gyur ba'i phyir ro // ji skad du **miñ chen gyi mdo sde** las sems žes *²⁾ bya ba goñ *³⁾ du ⁽⁶⁾ 'gro bar 'gyur ro žes bya ba'i bar du gsuñs pa yin no //

*¹⁾ D bžan; CPGN gžan. *²⁾ DC žes; PGN sems žes. *³⁾ DC gañ; PGN goñ.

〔訳8〕また、なぜ四蘊に対して「名」といわれるのかということ、変化するから「名」と呼ばれる。すなわち、所縁と行相と特殊な区別によって相続が断たれないかぎり、その相続が転変するからである。死んで色身が捨てられてから他の生の自体としてその相続が転変するからである。あたかも『大名経』に「『心』というものは上昇す

⁴³ 『俱舍論』の経典の引用 (AKBh 129, 25–130, 5; ad AK iii. v. 19abc) に関しては、HONJO [1984] : SA 1300 (T 2, 357c29f.); SN vol. I, p. 206; PA [180] : EA, T 2, 714a12; AKVy 281, 5; 283, 16 などが対応文献として挙げられている。

⁴⁴ AVSN 120, 6–121, 4.

る」⁴⁵ということまでの間に説かれているように。⁴⁶

『俱舎論』の「世間品」(ad AK iii. 30a)において名の解釈が行われる⁴⁷。『縁起経釈』のこの箇所での解釈はその議論をさらにまとめた形になる。といっても、変化するから名と呼ばれる ('gyur bas na miñ śes bya) という。ただし、所縁 (*ālabana, dmigs pa) と行相 (*ākāra, rnam pa) などの説明は『俱舎論』になく、世親は「名」の解釈に新たな説明を加え、さらに『大名経』を引用してその関連性を強化しているといえよう。

2.2.6 増語の名

◎増語の名

'o na gañ sems dañ mi ldan^{*1)} pa'i 'du byed tshig bla dags miñ śes bstan pa gśugs śes bya ba dañ / sgra śes bya ba de la sogs pa de dag don gañ gis yin śe na / de dag ji skad du bstan pa 'di 'das pa dañ / ma 'oñs pa'i dmigs⁽⁷⁾ pa gśan bskal pa rnam la yañ miñ gis 'dud par byed pas miñ śes bya'o //

*1) DPN ldan; CG mi ldan.

〔訳9〕ならば、およそ心不相応行である増語(異名, *adhivacana) が名であると説かれるが、「色」(*rūpa) といわれ、また「声」(*śabda) といわれること等々がある場合、これらはいかなる意味によってなのかというと、それらは説かれたとおりであり、これは過去と未来の所縁が他の諸々の劫においても、名によって顕されるので、「名」と言われるのである。

有対触と増語触の二触に由来する増語に関して、『俱舎論』の「触支」の解釈において、世親は二説を挙げている⁴⁸。また『縁起経釈』の触支においても論じている。ここでは心不相応の視点から adhvācāna を名とする視点でその説を示す。『決定義経註』⁴⁹によると、経量部 (Sautrāntika) は語を自性とするから、adhivācāna は色法に属すると考えるが、婆沙師 (Vaibhāṣika) は adhvācāna が不相応行であるから、行蘊に属するという。しかし、識に縁って名色があるというときの「名」は adhvācāna の名のみではなく、四無色蘊の名

⁴⁵ 『称友釈』の名の解釈:〔梵本〕AKVy 303, 13–304, 2,〔藏訳〕AKVy_t P338b8–39b7 (この箇所の後半は、丹治 [2006: 253, fn. 32] 参照)。

『大名経』: SN 55.21 mahānāma, 『雑阿含経』卷三十三, 第 930 経 (T 2, 237b21–c38)

称友釈における『大名経』の引用:〔梵本〕AKVy 303, 32–304, 2,〔藏訳〕AKVy_t P338b8–39b7

このなかで特に『雑阿含経』において「神識上昇」という経句があり、『縁起経釈』の引用とよく一致している。

⁴⁶ 『決定義経註』では、次のように説明される。

AVSN 120.3–5: kasmāc catvāraḥ skandhā nāmety ucyante? tṛṣṇābhiṣyanditakarmakleśavaśeṇa namanāt, upapattiyantaraṃ namanād ity arthaḥ / rūpādiṣv artheṣu namatīti vā nāma/ ālabanākāragrahaṇād iti yo 'rthaḥ /

〔訳〕なぜ四蘊は名と呼ばれるのか。貪愛に満ちあふれた業と煩惱によって変化するから (namanāt, 動詞語根 nam 曲げる) であり、生起した後に変化するから (namanāt 転変) であるという意味である。あるいはまた、色などの対象に向ける (namati) から名 (nāma) である。それは所縁 (ālabana) と行相 (ākāra) を把握するから (grahaṇād) であるという意味である。

⁴⁷ AKBh 142, 15–19. 楠本 [2007: 175–77; 244–47] 参照。

⁴⁸ AKBh 143, 21–144, 6. 楠本 [2007: 254–59] 参照。

⁴⁹ AVSN 119, 6–11.

を指すのである。一方、『縁起経釈』では、心不相応行の *adhivacana* という説の名を挙げ、その問題を説明する。これは、『俱舎論』の触支の「二触」（有対触と増語触）の解説からすると、その第一説は二触が所依・所縁として、第二説は所依・相応として成り立つということから、ここでは『俱舎論』の第二説に近いであろう。

2.2.7 色の語源解釈

世親は『俱舎論』の「世間品」において、名色支の解釈に関して「名」の説明のみを述べ、「色」の説明は「界品」の「色」の解釈に譲る、という議論の構成をとっている。この『縁起経釈』の名色支では、『俱舎論』「界品」から「世間品」までの「色」についてのあらゆる議論が集約されている。また、『釈軌論』においても色に関する議論⁵⁰がなされていたため、この『縁起経釈』の解釈はそのまとめともなっている。

⑩色の語源解釈と経証

mig gi yul ni gzugs źes bya ba 'jig rten na ^(P28a) grags na / 'dir 'byuñ ba dañ 'byuñ ba las gyur pa thams cad la ci'i phyir gzugs źes bya še na / gnod par gyur pa yin te / de bas na gzugs źes mdo sde ^(D25a1) gźan las bstan te / gzugs źes bya ba ni gnod par^{*1)} gyur pa źes bya'o // ji skad du *lha'i tshigs su bcad pa* las /

nad pa gñid ni ga la yod // zug rdus zug bźin gnod par 'gyur //

źes bya ba dañ / ji ltar yañ *phran tshigs* las /

'dod pa skyed^{*2)} pa'i lus ⁽²⁾ can te // gal te 'dod pa tshol byed pa //

'dod pa de dag ma grub na // zug rdus^{*3)} zug^{*4)} pa bźin du gnod //

ces 'byuñ no // 'byuñ ba dañ 'byuñ ba las gyur pa la cis gnod ce na / lag pa'i 'dus te reg pa la sogs pas gźan du gyur par byas so // ^(G40b) gzugs na spyod pa^{*5)} dag la ji ltar gnod ⁽³⁾ par^{*6)} 'gyur źe na / de'i sa pa'i mes so // sems can gyi grañs su gtogs^{*7)} pa la de bźin du ñid^{*8)} kyi^{*9)} mes so // mthu khyad par can dañ ldan pas kyañ gnod par nus pa'i phyir ro // gnod par byar med pa yin yañ de'i rigs ^(N29a) yin pa'i phyir gzugs źes bya ste / sañs rgyas kyi sprul pa ⁽⁴⁾ bźin no //

*1) D bar; CPGN par. *2) DC skyed; PGN skyes. *3) DC rdus; PGN rdu. *4) DCPG zug; N zub? *5) DN ba; CPG pa. *6) D bar; CPGN par. *7) DC rtogs; PGN gtogs. *8) PSVy de bźin du ñid; PSVyT de ñid. *9) DCPG kyi; N gyi.

〔訳 10〕 眼の境は色だということは世間に認められているが (**loke pratītam*)、ここでは大種と大種所造の一切をなぜ「色」というのかというと、変壊するのであり、それゆえに「色」と他の経典⁵¹に説かれる。すなわち、「『色』は変壊するのである」と

⁵⁰ これは『釈軌論』の第三章に関わる問題であるが、李 [2001] に詳しい。

⁵¹ AKBh: rūpyate rūpyata iti bhikṣavas tasmād rūpopādānaskandha ity ucyate / kena rūpyate / pāṇisparśenāpi spr̥ṣṭo rūpyata iti / 傷められる (rūpyate), 傷められるから (rūpyata iti), 比丘らよ、それゆえ色取蘊と呼ばれる。何によって傷められるのか。手の接触によって触れられるのも傷められるという。
〔梵本〕AKBh 9.10–12, EJMA [1989: 13.19–20], 〔藏訳〕AKBh₁ D 32a7–b1, P 34a6–7, 〔玄奘訳〕『俱舎論』卷一 (T 29, 3b22–25)

これは『食喻経』の引用 (Ho [1014], PA [9]) であるが、関連資料については、SN 22.79. khajjani (SN III, 86–91; 英訳: BHIKKHU Bodhi [2000: 914–918]), 『雜阿含経』卷二第 46 経 (T 2, 11b21–12a8;

su ruñ ba, 変壞) から得られ、あるいは rūpañīya (変礙), rūpya (示現) などという派生語を意味の根拠とすることになる⁵⁵。さらに色界繫の色も劫火によって壊れるので、色の無常さが窺える。このほか、仏の変化などは、色の種類に属するので、壊れないとしても色に分類されるという。

2.2.8 有対礙と無表色

色の語源解釈に続いて、色の妨げられるもの(変礙)という性質からすると、妨げられない表色と無表色がどうして色かという問題が『俱舍論』においても論じられた⁵⁶が、ここではさらにその議論をまとめて記している。

①有対礙

gʒan dag na re gzugs źes bya ba ni gags byed pa yin no źe'o // **tshigs su bcad pa de ñid**
dañ mi 'byor pa yin no // grañ ba dañ dro ba dañ / bkres pa la sogs pas kyañ gags byed
do źes byar mi ruñ no //

〔訳 11〕他の人々は〔主張する。〕「色」というのは、妨げられるものである、と。しかし、その上記の偈と相応するのではない。寒さと暑さと飢えなども妨げられるものである⁵⁷というのは妥当ではない。

色(*rūpaṇa)は有対礙のもの(*pratighāta)なのだと言主張するのは、有部などの部派の者達であろう。しかし、寒さなどは有対礙の性質がなかったのに、色(大種所造色)に属される。このため、この色の有対礙の説には矛盾が生じる。

②無表色

rnam par rig byed ma yin pa ji ltar gzugs yin źe na / rnam⁽⁵⁾ par rig byed ma yin pa źes
bya ba rdzas gʒan ni cuñ zad yod pa ma yin gyi /*¹⁾ khas blañs pa dañ chos ñid kyis lus
dañ ñag ldog pa dañ ldog pa ma yin pa tsam la de btags*²⁾ pa yin pa'i phyir ro // btags*³⁾
pa can de ni gzugs med pa ñid yin no // mtshan ñid dañ ldan pa ni*⁴⁾ ma yin te / gzugs⁽⁶⁾
yod pa la de btags*⁵⁾ pa yin pa'i phyir ro // rnam par rig byed ma yin pa la brjod par bya
ba mañ du yod de / re źig^(P28b) 'dir śin tu 'phros pa bźag*⁶⁾ go // 'di'i rnam par ñes pa ni
phyis bya'o // ji ltar miñ dañ gzugs ñid yin pa bstan zin to //

*1) D gyi; CPGN gyi /. *2) DC brtags; PGN btags. *3) DC brtags; PGN btags. *4) DC ñid; PGN ni. *5) DC brtags; PGN btags. *6) DC gśag; PGN bśag.

〔訳 12〕無表はどうして「色」であるのかというと、無表という他の実体(*dravya)は全くないが、承認(*abhyupagama)と法性によって、身と語が止滅したことと、〔身と語が〕止滅していないことだけに対してそれを仮説するからである。仮説されるものを有するそれは、まさに色ではないのである。相(特徴)を有するのではない。なぜなら、色を有するものに対して、それを仮説するからである。無表について述べるべきことは多くある⁵⁸が、しばらくここで傍論を止めておこう。この決択は後ですべ

⁵⁵ 『俱舍論』では、さらに bādhyate (可惱壞, 動詞語根 bādḥ) をもって rūpyate を解釈する。

⁵⁶ 〔梵本〕AKBh 9, 15–10, 5; EJIMA 14, 3–14, 〔玄奘訳〕『俱舍論』卷一 (T 29, 3c13c20)

⁵⁷ 『雜阿含經』第 46 經「食喻經」、参照。冷・暖・渴・飢などが色受陰に属される。

⁵⁸ 『俱舍論』の「業品」や『成業論』などにおいて無表業が非実有であることはすでに議論されてい

きである。どのようにして名色であるのかということが説かれ終えた。

無表色に関して、実は仮説にすぎず、実体 (*dravya) がないという。それは身と語が止滅したことで止滅していないことによって仮説するので、色の特徴を有するのではない。

以上、世親は要点のみに絞って、五蘊を無色の四蘊と色蘊に分けて解説を行った。そして、さらに名と色の語源的な意味を示したうえで、その五蘊である名色を解説し終えたのである。

3 結び

以上のように世親は、『縁起経釈』の「名色支」の前半において、五蘊を中心として考察を加える。これによって世親は、『縁起経釈』では、すでに「識支」に阿頼耶識説を導入したことを踏まえたうえで「五蘊」を論じるが、その内容はかなり『俱舍論』の「界品」(色、四無色蘊)と「世間品」(名色支の「名」の解釈)を依用していることがわかる。しかしながら、『縁起経』の色蘊の定義にしたがう『縁起経釈』から『五蘊論』との関係を考えてみると、その一部(例えば色蘊の定義など)は『俱舍論』と異なっており、むしろ『五蘊論』と一致している。また『五蘊論』において、その「識」の解釈は阿頼耶識の導入のみではなく、マナ識の原型ともいえる内容が示され、それらが『三十頌』の第六、第七頌のマナ識の定義と一致するのである。このような事実から、『五蘊論』を『縁起経釈』と『三十頌』の間に位置させることができるであろう。とくに、『縁起経釈』から『五蘊論』および『三十頌』への思想的発展は極めて重要なポイントであると考えられる。

〈略号および使用テキスト〉

- AKBh *Abhidharmakośabhāṣya*, P. Pradhan ed., Patna, 1967 (repr. Patna, 1975).
- AKBh_t D No. 4095 (Taipei, Karmapa Red Letter ed., Tohoku No. 4090), P No. 5591 (Otani).
- AKUp *Abhidharmakośaṭīkopāyikā*, Śamathadeva, D No. 4094, P 5595.
- AKVy *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, Yaśomitra, Wogihara, U. ed., 1932–1936 (1971).
- AKVy_t Tib. tr. of AKVy, D No. 4092, P No. 5593.
- AS (ASBh) *Abhidharmasamuccaya(-bhāṣya)*, N. Tatia ed., Patna, 1976.
- AVSN *Arthaviniścayaśūtranibandhana, the Arthaviniścaya-sūtra and its Commentary (Nibandhana)*, Samtani, N. H. ed., Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna, 1971 (repr. 2005).
- NS *Fünfundzwanzig sūtras des nidānaśamyukta*, Thandrabhāl Tripāthī, Berlin, 1962.
- PĀ *Kanonische Zitate im Abhidharmakośabhāṣya des Vasubandhu*, Bhikkhu Pāsādika, Göttingen, 1989.
- PS *Pratītyasamutpādasūtra*, cf. CHUNG [2008: 107–10, sūtra 298].
- PS_t Tib. tr. of *Pratītyasamutpādasūtra*, cf. DE JONG [1974].

- PSk Vasubandhu's *Pañcaskandhaka*, ms. 7 fols. Li Xuezhong and Ernst Steinkellner ed., Beijing-Vienna, 2008.
- PSkV Sthiramati's *Pañcaskandhakavibhāṣā*, ms. 73 fols. cf. KRAMER [2008] .
- PSVy *Pratītyasamutpādavyākhyā*, cf. TUCCI [1930] .
- PSVy_t Tib. tr. of *Pratītyasamutpādavyākhyā*, *dKar chag 'phang thang ma* (KP) 581, Dankarma 653 (LL/YS 653/647), Bu ston 3746, N 4285, P 5496, D 3995, C 3962.
- PSVyT (PSVyT) Tib. tr. of *Pratītyasamutpādavyākhyāṭīkā*, *dkar chag 'phang thang ma* (KP) 582, Dankarma 654 (LL/YS 654/648), Busto 3747, N 4286, P 5497, D 3996, C 3963.
- PSĀVNS *Pratītyasamutpādādivibhaṅganirdeśasūtra*, cf. CHAKRAVARTI [1932: 197–99] .
- PSĀVNS_t Tib. tr. of PSĀVNS, cf. DE JONG [1979] .
- SA 『雑阿含経』
- Sn *Suttanipāta*, PTS ed.
- SN *Samyuttanikāya*, PTS ed.
- T 『大正新修大藏経』

(参考文献)

- BHIKKHU, Bodhi
[2000] *The Connected Discourses of the Buddha*, Boston: Wisdom Publications.
- CHAKRAVARTI, Niranjan P.
[1932] “Two Brick Inscriptions from Nalanda,” *Epigraphia Indica* 21, 193–99.
- CHUNG, jin-il (鄭 鎮一)
[2008] 『雑阿含経相当梵文断片一覽』 東京：山喜房佛書林。
- DE JONG, Jan W.
[1974] “A Propos du *Nidānasamyukta*,” *Melanges de sinologie offerts a monsieur Paul Demieville II (Bibliothèque de l'institut des hautes Etudes chinoises, college de France 20)*, pp. 137–49 (repr. 1979, 237–49).
[1979] *Buddhist Studies*, G. Schopen ed., Berkeley.
- EJIMA, Yasunori (江島 惠教)
[1989] *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu, Chapter I: Dhātunirdeśa*. Bibliotheca Indologica et Buddhologica 1. Tokyo: The Sankibo Press.
- ENOMOTO, Fumio (榎本 文雄)
[1989] *Śārīrāthagāthā, A Collection of Canonical Verses in the Yogācārabhūmi, Part 1: Text. Sanskrit=Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen*, Göttingen.
- FRAUWALLNER, Erich
[1951] *On the Date of the Buddhist Master of the Law Vasubandhu*, Serie Orientale Roma 3.

- [1956] *Die Philosophie des Buddhismus*. Berlin: Akademie Verlag.
- HONJO, Yoshifumi (本庄 良文)
[1984] 『俱舎論所依阿含全表 I』 京都.
- KRAMER, Jowita
[2008] “On Sthiramati’s Pañcaskandhakavibhāṣā: a preliminary survey,” *Sambhāṣā* (27), pp. 149–71.
- MEJOR, M. [2002] “On the sevenfold classification of the negative particle (*nañ*) (Grammatical explanation of *a-vidyā* in Vasubandhu’s *Pratītyasamutpādayākhyā*)” 『桜部建博士喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』, 京都平楽寺, pp. 87–121.
- MUROJI, Yoshihito (室寺 義仁)
[1991] “Vedanā- und tṛṣṇā vibhaṅga in der *Pratītyasamutpādayākhyā*,” 『密教文化』 173, pp. 74–98.
[1993] *Vasubandhus interpretation des Pratītyasamutpāda*. Eine kritische Bearbeitung der *Pratītyasamutpādayākhyā* (*saṃskāra- und Vijñānavibhaṅga*). Stuttgart.
[1997] “Guṇamati’s Version of the PSAVN,” *Tibetan Studies* (Proceedings of the 7th seminar of the International Association for Tibetan Studies, Graz 1995), Vol. II, pp. 647–56.
- Tucci, Giuseppe
[1930] “A Fragment from the *Pratītya-samutpāda-vyākhyā* of Vasubandhu,” *Journal of the Royal Asiatic Society*, pp. 611–23.
- 加藤 純章 [1989] 『経量部の研究』 東京：春秋社.
楠本 信道 [2007] 『『俱舎論』における世親の縁起観』 京都：平楽寺書店.
斎藤 明他 [2011] 『『俱舎論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集』 東京：山喜房佛書林.
- 莊 崑木 (釈 大田)
[2012] 『『瑜伽論』と『俱舎論』・『撰大乘論釈』とにおける法蘊体系の相違とその背景』 『東アジア仏教研究』 10, pp. 57–70.
- 滝川 郁久 [1996] 「世親の『五蘊論』—校訂テキストとリファレンス」 『論叢アジアの文化研究』 5, pp. 1–33.
- 丹治 昭義 [2006] 『中論釈 明らかなことば II』 関西大学出版.
- 長崎 法潤・加治 洋一
[2004] 『新国訳大蔵経 雑阿含経 I』 東京：大蔵出版.
- 廣澤 隆之 [2005] 『『唯識三十頌』を読む』 大正大学出版会.
- 本庄 良文 [1985] 「阿含と俱舎論—界品 (2) —」 『南都仏教』 54, pp. 1–17.
[2001] 「世親の縁起解釈—受支」 『仏教文化の基調と展開』 第一巻, 東京：山喜房佛書林, pp. 259–72.
- 松田 和信 [1982a] 「世親『縁起経釈 (PSVy)』におけるアーラヤ識の定義」 『印度学仏教

- 学研究』31-1, pp. 63-66.
- [1982b] 「『分別縁起初勝法門経 (ĀVVS)』—経量部世親の縁起説—」『仏教学セミナー』36, pp. 40-70.
- [2010] 「五蘊論スティラマティ疏に見られるアーラヤ識の存在論証」『インド論理学研究』I (松本史朗教授還暦記念号), インド論理学研究会, pp. 195-212.
- 室寺 義仁 [1993] 「ヴァスバンドゥによるアーラヤ識概念の受用とその応用」『高野山大学論叢』28, pp. 23-59.
- [1995] 「死の定型表現を巡る仏教徒の諸伝承」『密教文化』190, pp. 101-12.
- [1996] 「誕生(再生)の定型表現を巡る仏教徒の諸伝承」『高野山大学論文集』高野山大学創立百十周年記念論文集編集委員会, pp. 181-96(L).
- [2000] 「ヴァスバンドゥによる『識』の理解—『五蘊論』を中心として—」『加藤純章博士還暦記念論集 アビダルマ仏教とインド思想』東京: 春秋社, pp. 167-80.
- [2004] 「『中辺分別論疏』と『縁起経釈』」『インド哲学仏教思想論集』京都: 永田文昌堂, pp. 701-20.
- [2008] 「輪廻の原因としての無明—諸々のサンスカーラについての無知」『高野山大学論叢』43, pp. 47-60.
- [2010] 「ヴァスバンドゥの注意力 (manaskāra) 解釈」『インド論理学研究』I, pp. 213-22.
- 李 鍾徹 [2001] 『世親の思想研究—『釈軌論』を中心として—』東京: 山喜房佛書林.
- 矢島 道彦 [1997] 「Suttanipāta 対応句索引」『鶴見大学仏教文化研究所紀要』2, pp. 1-97.

2012.10.04 稿

そう こんもく (しゃく だいでん) 東京大学大学院博士課程単位取得退学

Vasubandhu's Interpretation of *nāmarūpa*
in the *Pratītyasamutpādayākyā*

CHUANG, Kunmu
(Shih Datian)

The *Pratītyasamutpādayākyā* (hereafter PSVy) is divided into two parts, the 'Ādi' and the 'Vibhaṅga.' The Ādi is the introduction, and twelve sections of the *Vibhaṅga* discuss the doctrine of *pratītyasamutpāda* (i.e. "dependent origination"). The fourth section 'nāmarūpa' appears to have an important relationship between Vasubandhu's *Abhidharmakośabhāṣya* and his *Pañcaskandhaka*, specifically about his five *skandhas* theory.

When Vasubandhu tried to become a mahāyānana-ist (or vijñānamātra-ist), he wrote the *Vyākhyāyukti*, the *Karmasiddhi*, the PSVy, the *Pañcaskandhaka*, etc. But the PSVy is an interpretation of a very short Āgama sūtra, the *Pratītyasamutpādasūtra*. This means that he wanted to try to combine the Āgama and the *Mahayāna*. On the other hand, because he must follow the structure of the *Pratītyasamutpādasūtra* when discussing its contents, the order of five *skandhas* in the PSVy is not the same as that in the *Abhidharmakośabhāṣya*.

In this study of *nāmarūpa* in the PSVy, with the help of Sanskrit text of the *Pañcaskandhaka* found in recent years, I tried to understand why Vasubandhu wrote the PSVy, what differences are there between his *śāstras*, and what is consistent in these treatises. This may be helpful for understanding Vasubandhu's relevant theories.